

飛んだが、逃げたのではない、引き揚げたのである。庇理屈も理屈である。時代劇の映画でも悪役は「逃げる」とはいわない。「覚えてる」ともいうが、忘れるはずがない。隣町も炭鉱町であった。

1975年に「倭人伝」を書く。

男心をくすぐる人

の4階のホールを見上げて「いずれ、ここで俺の本を上演する」と誓ったものである。ラッパズボンのシーパンに「ム草履履きであった。肩まで掛かる流行りの長髪である。まだ髪の毛が豊富にあった時代である。

三郎役は大竹まことが演じた。かんしゃく玉の鉄を風間杜夫、巡查の保造をきたろう、いまではそうそうたる連中である。容赦のない松浦弁、俳優たちは跳び、叫び、走った。大竹まことは足を骨折した。「倭人伝」でわたしは演劇界に認知されるこ

結婚して子育てが終わってカムバックする女優もいる。やはり舞台は忘れられないものらしい。本の人物名をつけるのに「えいっ」と電話帳を広げて、鉛筆で指すという作家もいる。芸名をつけるのも難しい。

わたしの故郷の隣町に花村静子という美少女がいた。男子生徒の中で噂となり、隣町の中学校まで見物に行った。4、5人で行ったはずだが、隣町の中学校には十数人の男子生徒が待機していた。「引き揚げる」である。「逃げるのか」と罵声が

いて、六本木の俳優座劇場で上演することができた。俳優座劇場は新劇の聖地であった。わたしは「倭人伝」で、また松浦を振り返ったのである。「倭人伝」は1980年に新宿の紀伊國屋ホールでも上演している。紀伊國屋ホールは新劇の甲子園といわれるホールである。まだ20代だったわたしは、紀伊國屋書店

「倭人伝」は漁師の若者と炭鉱の若者が、一人の女をめぐる対立する話である。女は炭鉱の若者のリーダー、悪の限りを尽くし三郎の妹である。尽くし

たしの中では旧姓の花村静子さんのままである。静子はなにかの本で使いたい名前である。もちろん、静かな女だが、激しく情熱的な女として書く。

このたび、生まれ故郷松浦市から「教育文化功労賞」を頂いた。あまり功勞したつもりもないが、ありがたく頂いた。それを知った花村静子さんからすぐにメールがあった。「いまごろは上空かしろ。このたびは受賞おめでとうございます。人生の総括！世の中への恩返しOfYearです。いいご褒美頂きましたね。気をつけて帰ってね」。幾つになっても男心をくすぐる人である。



おかへへ。ごつたい。1979年に「肥前松浦兄妹心中」で幸田戯曲賞を、89年に「亜也子」で紀伊國屋演劇賞個人賞を受賞。日本劇作家協会元理事。松浦市で毎年、子供たちにミュージカルを指導している。川崎市在住。70歳。

「清水へ祇園をよぎる桜月夜
ごよみ逢ふ人みなうつろしき」
(与謝野晶子)
(松浦市出身)